

第2回多摩川流域歴史シンポジウム

『多摩川流域の中世』

講演：谷口 榮氏

－開催報告－



等々力溪谷



調布堰と黒松の林



六郷 多摩川緑地

平成31年2月9日（土）
多摩川流域懇談会

第2回多摩川流域歴史シンポジウム 「多摩川流域の中世」 開催報告

2019年2月9日(土) 13:00~16:30

狛江市中央公民館 地下ホール

参加者：61名(スタッフ含む)

主催：多摩川流域懇談会

1. 開会

佐山 公一氏

(多摩川流域ネットワーク)

寒くて足元の悪い中、大勢のご来場ありがとうございます。本



日、司会・進行を務めさせていただきます多摩川流域ネットワークの佐山と申します。本日はよろしくお願いいたします。

これまでに多摩川流域の中世ということで多摩川流域歴史セミナー中世版を4回やってきました。本日はそのまとめとして、第2回多摩川流域歴史シンポジウムを開催させていただきます。

配布資料として、本日のプログラム、それと「中世の東京低地と多摩川下流域」という講演資料、あと「意見・質問・感想カード」が入っていると思います。また、本日講演いただく谷口様の著書のご紹介と、多摩川流域懇談会の紹介のリーフレット、それと「多摩川を歌う」のチラシも1枚入っていると思います。

本日、歴史シンポジウムを開催するに当たりまして、狛江市さんに多大なご協力をいただきまして会場をお借りしています。狛江市の植木崇晴様にご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

2. 会場挨拶

植木 崇晴氏

(狛江市環境部環境政策課長)

本日、狛江市外からお越しの方、手を挙げていただけますか。多数の方、狛江までお越しいただきありがとうございます。



皆さんご承知のとおり、狛江市は全国で2番目に小さい市ですが、沢山の古墳があります。本日のこのシンポジウムをきっかけに、また足を運んでいただき古墳めぐり等をしていただければと思います。

3. 開会挨拶

神谷 博氏

(多摩川流域懇談会運営委員長)

お手元の資料の中に「多摩川流域懇談会」というパンフレットがあると思いま



す。セミナーの主催は多摩川流域懇談会で、歴史セミナーとシンポジウムはリピーターの方も多くほとんどの方はご存知と思いますが、要は多摩川流域の全ての市町村のネットワークです。事務局を国土交通省京浜河川事務所が務め、市民と行政、大学や企業のパートナーシップで、いい川づくりを目指す会です。この懇談会の活動の中に多摩川流域セミナーというものがあり、その一環として歴史の勉強をする歴史セミナーがあります。

歴史セミナーについては、チラシをお配りしたときに、その裏にこれまでの流れを一通り書きました。古代・中世・近世というふうに順繰りにやっていこうと、3回ずつぐらいでシリーズを進めています。古代シリーズは3回、まとめのシンポジウムを1回行っています。中世になるとやはりいろいろありますので、セミナーを4回開き、本日まとめのシンポジウムに至ったということです。入り口に第1回のシンポジウムの資料がありますが、このような形で本日のシンポジウムもまとめる予定です。

多摩川の中世史とはどのようなものか議論をするに当たって、本日は基調講演として葛飾区から谷口さんに来ていただきました。多摩川流域の外からの視点で、これまで多摩川流域の中では議論されてこなかった話題ということで、それを楽しみにされている方も多いと思います。お話を伺い、それを中心にして、これまで中世シリーズ4回で講演いただいた先生方からコメントをいただきながらまとめていきたいと思っています。

府中市の小野さんに一通り企画についても参画していただいていますので、最後、中世のまとめを小野

さんをお願いする予定です。また、歴史セミナーのシリーズ全体の顧問として小田先生に入っていただいていますので、小田さんにもその観点からまとめていただく方向で進めたいと思います。

4. 基調講演

『中世の東京低地と多摩川下流域』

谷口 榮氏
(葛飾区産業観光部
観光課 主査学芸員)



4.1 はじめに

私は葛飾で仕事をしています、生まれも葛飾です。なぜ多摩川の話ができるかというと、今日ご紹介する鎌倉御家人の葛西清重の所領が、実は多摩川下流域にありました。葛西と言うと、今は江戸川区の葛西をイメージしますが、もとは葛飾・江戸川・墨田・江東区の4区を合わせて葛西と呼んでいました。そこを鎌倉時代に治めていたのが葛西清重です。この葛西清重を紹介しながら、葛飾と多摩川下流域の2つの地域の共通点を探りたいと思います。

4.2 東京低地と多摩川下流の景観的特徴

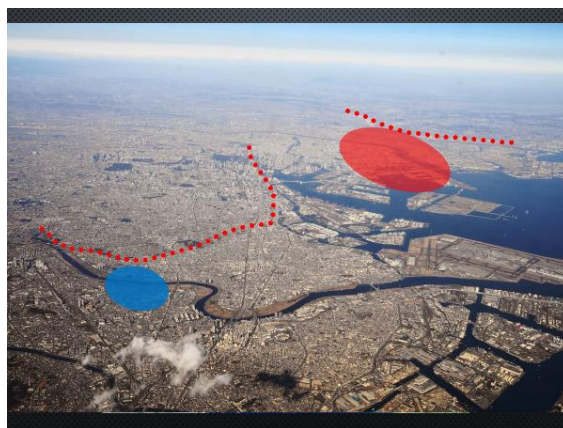
まず、葛西氏についてですが、秩父平氏という武士団がありますが、その流れを汲んだのがこの葛西氏です。武家の葛西氏というと、関東の葛西氏よりも奥州の戦国大名の葛西氏の方が有名です。奥州の葛西氏は、豊臣秀吉の奥州仕置によって滅亡しますが、主にこの奥州葛西氏の研究が行われていました。一方、関東の葛西氏の研究は、1990年の入間田宣夫先生が石巻市史をまとめたあたりから注目されるようになりました。

関東葛西氏の初代が葛西清重という人物です。葛西清重とはどのような人物だったか簡単に説明する

と、源頼朝のおそば近くに仕えた御家人になります。頼朝の信頼を得て、頼朝の寝所の警備について、鎌倉幕府の宿老として活躍をしていく武士です。この葛西清重は、平家討伐の頼朝の弟の範頼の軍勢として従軍し、遠く西国まで出張りました。さらに、奥州藤原氏を滅ぼした奥州合戦で拔群の功績を上げ、奥州方面にも所領をもらっています。初期の段階の合戦に従軍して数々の勲功を上げました。3代将軍源実朝が右大臣拝賀のために鶴岡八幡宮に詣でた際に、公暁によって実朝が暗殺されてしまいます。このとき葛西清重はその場に居合わせており、この事件がきっかけとなり出家しました。

葛西清重について、初期の鎌倉幕府で宿老として活躍し、頼朝のおそばで仕えたという武士像を押さえていただければと思います。

本題に入りますが、まずは「東京低地と多摩川下流域の景観的特徴」ということで、河川・低地・台地、この辺りを注目したいと思います。

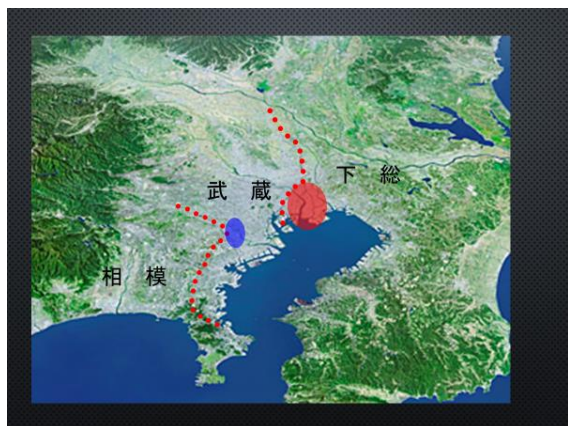


衛星写真からは、台地があり、その間に低地が広がっていることが読み取れます。青い部分が川崎市の丸子庄があったところです。それから、一部大田区の下丸子が該当すると思いますが、赤い部分が葛西になります。丸子は低地に位置していることがわかります。河川があつて低地帯で、そばに台地があるという地形環境が読み取れます。葛西のそばを流れる河川は今の江戸川です。当時は太井川とか太日川と言われていました。江戸時代になってから、こ

の川の名前が江戸川に変わっていきます。丸子と葛西はよく似た地形環境で、景観的にも同じということがわかると思います。

さらに、川が蛇行していました。直線的な川は近代になってから開削した放水路ですが、荒川の放水路はなぜ蛇行しているのでしょうか。比高差の少ない低地では、より低いところを求めて川が蛇行していきます。その点も共通点があります。この蛇行や川が身近にあるという点について、従来の評価は、洪水の頻発地域、氾濫源という点が強調されていましたが、それは現代的な目線でしかありません。歴史的な目線で見たときに、川の恩恵のことをしっかり考える必要があります。川の恩恵を考えることなく近代以前の歴史風景は見えません。この辺りが本日のポイントになります。

次に、領域的な境界性についてお話をしていきたいと思います。



葛西と丸子の中央に武蔵があり、武蔵国の橘郡に丸子はあるわけですが、この丸子の西方には今、横浜市があり、横浜市の西側の方から相模国になるわけです。葛西という地域には、もともと古代には下総国葛飾郡がありました。この葛飾郡というのは、葛飾・江戸川・墨田・江東という東京の4区に加え、江戸川の対岸の松戸や市川や船橋、さらに上流部の流山、野田、もう少し上流を見ると、埼玉県の三郷や春日部の半分、さらに上流は茨城県の古河に至るまで、ずっと葛飾郡に含まれます。南北にかなり長い広大な郡域だったんですね。その後、平安時代の後半に地域の再編成で葛飾郡が解体します。そ

のときに、今の江戸川を境に葛飾の東側、今の千葉県側を葛飾の「葛」と「東」で「葛東（郡）」と呼びました。そして江戸川から西の地域、今の東京都側は、葛飾の「葛」と「西」で「葛西（郡）」と呼ばれます。これにより「葛西」という領域名が誕生しました。

葛西という領域は、下総国の方から見ると、武蔵国に接した玄関口的な位置にあります。国境線を見ると、下総と武蔵は今の隅田川の川筋が国境となっていました。そして江戸時代になると、下総と武蔵の国境は隅田川から今の江戸川にシフトしていきますが、今日お話をする舞台は、下総だったときの葛西です。

4.3 葛西清重の所領経営

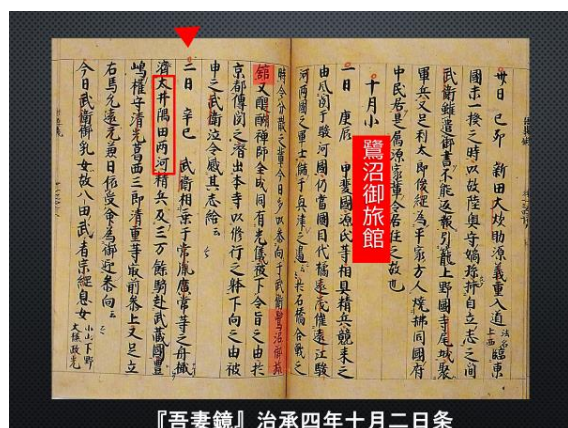
治承4年（1180年）の8月17日に、伊豆国の目代の山木兼隆の館を頼朝の軍勢が急襲します。夜襲をかけたわけです。そのときは今の三島大社のお祭りがあり、警護が薄かったと言われています。その夜、山木兼隆を討ち、打倒平家の狼煙を上げていくわけです。しかし、8月23日に石橋山の合戦で頼朝の軍勢は敗退してしまいます。頼朝は、舟で真鶴から房総半島の方に再起をかけて移動しました。頼朝の軍勢は、そこでちりぢりになりましたが、頼朝は安房に入って上総、下総と進軍していくわけです。そして9月には下総国の国府である市川の国府台あたりまで軍勢を進めました。



そして治承4年の10月2日に、太日川と隅田川を渡って武蔵国に入り、10月6日に最終的な目的地

の鎌倉に入ります。このような行程がありますが、今日お話ししたいのは、この武蔵国に入るときの日川と隅田川の渡河についてです。

鎌倉幕府が編纂したと言われる「吾妻鏡」という資料があります。この北条本の10月2日を見ますと、ここでは太日ではなくて太日で隅田河川と書いてあります。「武衛」と書いてありますが、これは源頼朝のことです。頼朝と上総広常、千葉常胤が舟で移動します。軍勢は別に移動していくわけです。このときに、太日川と隅田川を渡って武蔵に入りますが、さっきお話ししたとおり、前日に石橋山で軍勢が散り散りになるわけです。散り散りになった軍勢が鷺沼御旅館に集結しました。場所は下総国の鷺沼御旅館です。この場合の御旅館というのは旅籠などの宿泊施設のことでありません。尊い「御」がついているのは、頼朝が泊まったことを表します。従来の定説では、この鷺沼御旅館の比定地は鷺沼城という城がある千葉県習志野市内と言われていました。



最近、私と、今野さんという新宿の博物館の学芸員さんが言っているのは、葛飾の柴又に鷺沼というところがあり、鷺沼は柴又かもしれないと思っています。その辺りは私の本を見ていただくと詳しく書いてありますが、ここでは、頼朝の軍勢がどのように渡河して武蔵国へ入ったかに注目したいと思います。

「保暦間記」という史料があります。頼朝が実際に渡ったのは1180年の10月2日と言われていますが、それよりもかなり後の14世紀代になって書か

れた史料に、注目すべき記事があります。軍勢が須田八切を渡って滝野河原に進軍したと書いてあるのです。重要なことは、この「八切」です。地名を研究するときに重要なのは、表記した漢字で地名を考えず、音で考えることです。この「八切」とは、今の千葉県松戸市の矢切のことです。八切の意味は、「八」は谷のことです。谷が切れている、要するに八つ状のことを八切と言います。私は観光課に所属していますので松戸のパンフレットを見ますが、昔、戦があって、矢が切れたので矢切になったと書かれています。この八切の対岸は、葛飾の柴又です。この史料で重要だと思われるのは、14世紀の段階で八切が渡河地点として認識されていることです。意識されていることが重要となります。



矢切の渡しとも関係する話ですが、明治13年の迅速測図を見ると、矢切、柴又の位置が分かります。「保暦間記」に、ここを渡ったと書いてありますが、これは実は必然で、軍勢はこしか渡れません。なぜでしょうか。江戸川が流れていますが、浅瀬はここにしかないためです。戦国時代の史料には、ここは「がらめきの瀬」と書かれていますが、大潮が引いたときに撮った写真からは、岩盤があることが分かります。この岩盤の話をするとも30分かかるため簡単に説明します。

縄文時代に温暖化があり、縄文海進という海進が起きました。現在、下総台地の市川、松戸の崖のラインは直線的になっています。溺れ谷になるのが普通ですが、なぜ直線的になるのでしょうか。これは、縄文海進で海が入り込むときに波食したからで

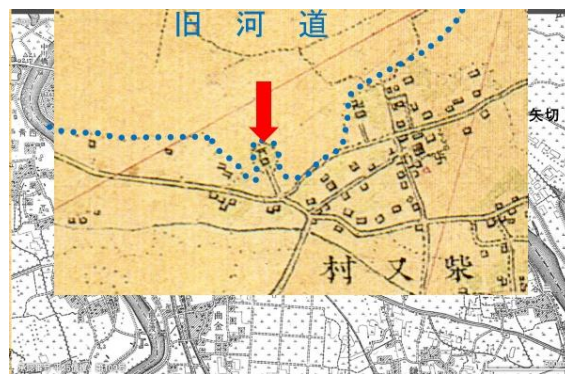
す。もともとは、下総台地は柴又の方まで延びていましたが、縄文海進がそれを削ってしまいました。その削った痕跡がこの岩盤なのです。この岩盤の正体は、下総台地の岩盤の名残なのです。この岩盤は、上流や下流にはなく、ここにだけ残っています。渡ろうとしたら舟で渡るしかありませんが、ここだけは歩いて渡れるところです。そして、その渡河地点が今は観光名所となっている矢切の渡しです。矢切の渡しはその点から、柴又、矢切の歴史的な渡河地点という記憶が刷り込まれていることになります。

柴又には国分道という、市川の国府や国分寺の方面に連絡する古い街道があります。この街道は重要です。頼朝の軍勢は、矢切、柴又を渡し、今の国分寺に行って武蔵国に入ったのではないかと考えていますが、武蔵国に入る上で大きな障害がありました。隅田川の西岸地域には江戸重長という秩父平氏の流れをくむ武將がいたのです。この秩父平氏の流れをくむ江戸重長は、同族の畠山や河越とともに反頼朝の立場でした。頼朝としては、武蔵を通過して相模の鎌倉に入りたいので、何とか江戸重長を自分の味方につけたいわけです。そのために、使者をつかわして説得工作をしますが、なかなか説得に応じません。それには様々ないきさつがありますが、説得に応じないに頼朝はしびれを切らしました。

そのような状況で、頼朝は重大なミッションを葛西清重に伝えました。江戸重長を太井の要害に誘い出して殺してしまえということです。ここまで言って重長が自分の味方にならないのなら、滅ぼしてしまえ。滅ぼせば、おまえに所領を与えるぞということです。葛西氏も江戸氏も両方とも秩父平氏の流れをくむ、大きく見れば同族でした。「沙石集」という史料によると、葛西清重はこれを固辞しました。固辞して、江戸重長を説得したのです。結果として、説得により江戸重長は頼朝の傘下に入りました。江戸重長だけではなく畠山も河越も頼朝の傘下に入り、武蔵国の秩父平氏は全て頼朝の傘下に入りました。

そのような状況で、頼朝は隅田川を渡って武蔵国に入ることができました。ここで注目してほしいのは「太井の要害」という施設の風景です。今、葛飾の人口は46万人です。江戸川と合わせると100万人を超え、家が密集して建っています。一方で、明治13年の史料を見るとまだ家はまばらでした。低地ですから要害と言われるような地形的な場所はなかなかありませんが、1カ所だけ目立つ場所があります。

太日川（江戸川）の旧河道の近くに八幡神社という神社があります。明治13年の地図を見ると、この八幡神社だけ、地形が岬状に突出しており、その突先に古墳が築かれています。



この八幡神社には、東京の下町で唯一、前方後円墳が見つかっています。本日、狛江の古墳の話も出てきましたが、古墳というのは単なるお墓ではありません。権力の象徴であり、地域のランドマークにもなります。大正のころの写真を見ると、八幡神社が周囲よりも少し小高い場所に位置していたことがわかります。

この状況からすると、今、八幡神社の古墳は、おそらく3メートルほど土盛りしていたと思います。そのような人工的な構造物は、当時とても目立つはずでした。私たちはこの古墳を調査したとき、古墳の周りに水をめぐらせる「周溝」という構造が、少しびつになっていることに気がつきました。このいびつが生じた理由は、平安時代の終わりから鎌倉時代に手を入れて改変したためです。そのため、この古墳を利用して太井の要害が築かれたのではないかと推測しました。

太井の要害の機能とは何かを考えるにあたり、先ほど前面に旧河道があったと話しましたが、河道には舟の行き来があるわけです。そのため、舟の交通を監視したり、また太日川から東の地域の状況を監視したりすることが太井の要害の機能だったのではないかと考えています。

蛇足ですが、この古墳から 2001 年の 8 月 4 日に埴輪が出ました。帽子をかぶっていましたが、帽子をかぶった埴輪というのは、全国的に見ても珍しくはありません。ただし、つばが回るハット型の帽子は珍しいです。これが柴又から出てきたということで、寅さん似の埴輪だと話題になりました。また、容姿だけではなくて、さっきお話しした出土した日が重要です。8 月 4 日は、渥美清さんの命日なのです。この偶然性に一番びっくりしたのは山田洋次監督で、びっくりして記念写真を撮りに来てくれました。

この埴輪は寅さん似の埴輪として有名になりましたが、学術的には何が重要なのかというと、帽子です。テレビで「チャングム」というドラマを放送していましたが、その中では朝鮮半島の宮廷の男子の正装として帽子がでできます。この古墳は 6 世紀の末から 7 世紀の初頭の古墳ですが、当時の日本には帽子をかぶるという風俗はありませんでした。一方、歴史の教科書では、朝鮮半島の渡来文化として帽子が挙げられています。このことから、この葛飾・柴又の古墳は、当時としては最先端の渡来文化が既にこの地域、柴又に根づいていたということを教えてくれる、寅さんに似ているだけではなく、学術的にも重要な資料となります。

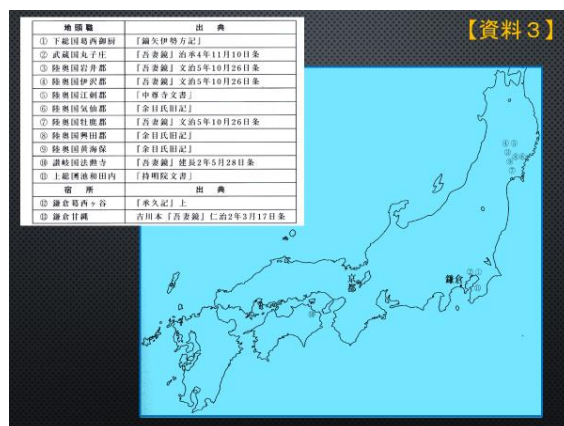
おさらいですが、頼朝の軍勢が下総府中に 9 月の段階で入っていきます。しかし、このときに江戸重長は敵対していましたため、軍勢はここから先の武蔵には進めませんでした。江戸重長が頼朝の傘下に入ることによって、頼朝が武蔵国に入ることができるようになったわけです。そして、この矢切、柴又のところを軍勢は渡り、須田——これは墨田のところですが、そして滝野川の方に移動していったと考

えています。この進軍のルートの中で、先ほどご紹介した太井の要害も十分機能していたのだろうと考えています。



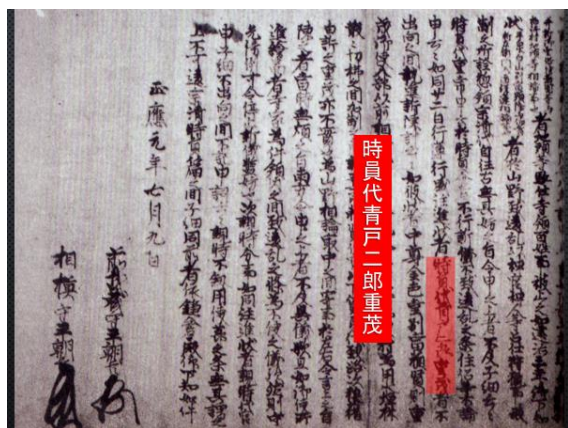
次に、清重の所領経営における、所領とネットワークの話をしていきたいと思います。清重は葛西が本拠で、鎌倉に屋敷がありました。葛西ヶ谷という地名が今でも鎌倉に残っています。葛西清重の館があったところだろうと言われていますが、鎌倉だけでなく、葛西氏は奥州や四国の方も含めて各地に所領を持っていました。では、これらの所領をどのように経営していたのでしょうか。そのことを知る上で重要なのが奥州の所領です。皆さんご存じの中尊寺金色堂のある平泉も葛西清重の所領になります。

今度、平泉に行かれたら、途中から上るのではなく、「関山」と書いてある碑がある玄関口から参道があるので、そこから上っていく前に左側を見てください。そこに、葛西クリーニングという店があります。もともとは、関東の葛西氏が奥州に行ったことを教えてくれます。



葛西氏の所領の押さえ方はおもしろく、石巻も押さえていました。なぜこのように石巻と平泉などの内陸部と離れているのでしょうか。重要なのは、北上川を押さえることです。要するに、奥州を経営していく上で、この北上川の海との出入り口・石巻、ここを清重がおさえているから上流も経営できるわけです。まさに、この所領のおさえ方は、この北上川の舟運をしっかりおさえているということがわかります。ここで意識してほしいのは、鎌倉武士のイメージです。鎌倉武士はただ戦をするだけではなく、このように河川を利用した舟運のノウハウも持っていないと所領の経営はできないということです。

平泉には出先機関として葛西氏の館があったと言われています。具体的には、本拠は葛西で、鎌倉幕府の仕事をするために鎌倉に屋敷がありました。では、どのように各地の所領と連絡をとっていたのでしょうか。そのことを教えてくれる史料が中尊寺に残っていました。



正応元年（1288年）の関東下知状という史料です。この文書ができたころには葛西清重は既に亡くなっており、葛西清重の子孫、末裔が中尊寺と争いになって相論を起こしたと書かれています。そのときの幕府の裁定がおもしろいのは、「時員(ときかず)代官青戸二郎重茂(しげもり)」と出てくることです。時員とは葛西氏のことで、葛西時員と言います。また、代官として青戸二郎重茂が登場しています。この青戸はどこかと言うと、葛飾区の青戸です。京成電車で青砥駅とありますが、青砥駅の

「砥」というのは砥石の「砥」を書いていますね。砥石の「砥」と扉の「戸」とどちらが正しいのかというと、両方正しい言えますが、歴史的に見ると扉の「戸」の方が古いです。もともと「戸」は「津」から来たと言われています。これから、葛西の青戸にいた武士が、わざわざ奥州の所領を経営するために葛西氏の代官として派遣されたことがわかります。つまり葛西氏は、自分の家臣、または一族を代官として所領に派遣してネットワークを維持していたことがわかります。

4.4 葛西清重と武蔵国丸子庄

「佐竹攻め前後の状況」という史料があります。治承4年10月6日に頼朝は鎌倉に入りましたが、20日には富士川の合戦が行われていました。西からの平家の軍勢の進攻を富士川で対応したわけです。そして、西の憂いを一度せきとめました。今度は東の憂いがあります。頼朝は富士川の合戦に勝ち、東海道を上つていこうと思いましたが、関東の武士団が「今はその時期ではない。まだ様々な憂いがあるからその対応をした方が良い」と主張したため踏みとどまりました。その際に、一番押さえるべきところは佐竹でした。佐竹を攻めて、奥州と関東の境界をしっかりと守ろうとしたわけです。佐竹を滅ぼした後で、頼朝は小栗重成の館に入ります。その後に葛西清重の館に行き、そのときに葛西清重に丸子庄を与えます。葛西清重がこの戦に従軍したかどうかはわからず、なぜ清重がこのような名誉を授かったのかはよくわかりませんが、これを鎌倉時代の街道から見るとその辺りが少しわかると思います。

常陸国の国府は石岡にあり、頼朝は鎌倉から石岡に入りました。石岡を本陣として金砂城を攻めたわけです。勝った頼朝はこの後、小栗に行きました。

「吾妻鏡」の一部を出しましたが、便路を使って小栗に行き、そして葛西に行っています。経路としては、中つ道を通るルートがありますが、私は頼朝の移動は舟だったと思っています。

頼朝の交通手段を確保したのは葛西清重で、佐竹と戦って軍功を上げたというよりは、帰路に対しての褒美として丸子庄をもらったのではないかと考えています。

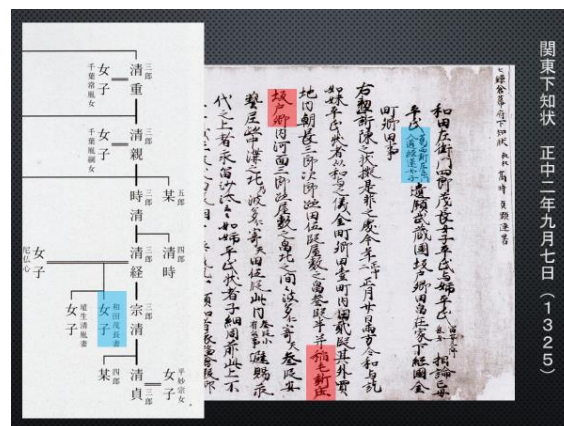


時代は少し後になりますが、奥大道に夜な夜な出没する群盗の取り締まりを命じた史料があります。取り締まりを命じた御家人として、葛西氏の名前があります。葛西老岐六郎左衛門尉（葛西朝清）、同老岐七郎左衛門尉（葛西時重）という人物が、この奥大道の警護に当たるように命じられたようです。葛西氏は奥州に所領をもらっているため、奥州のどこかでこの2人が命じられ警護に当たったと考えられていました。しかし、本当にそうだったのでしょか。奈良の東大寺の図書館に紙背文書があり、その中に「左衛門尉某所」の記載があります。

埼玉県の北東に太田庄という広大な荘園がありますが、左衛門尉はこの太田庄で堤防の築堤や修理も含めた修固を命じられました。この左衛門尉が、定期的に難しいため免除してほしい、と幕府に出した文書です。初めは、文中の左衛門尉が誰かわかりませんでした。この左衛門尉は、丸子庄を管轄している庄益としての役（税）として太田庄の堤の修理に当たるように命令されています。ということは、左衛門尉は先ほどの佐竹攻めで丸子庄をもらった葛西氏にも左衛門尉と名乗る人物がいるので、左衛門尉某は葛西氏の可能性が高くなるわけです。

では左衛門尉は葛西氏の誰が該当するかというと、朝清と時重になります。この奥大道の警護に当たった人物か、もしくはその流れを汲んだ者です。

葛西氏は、従来は奥大道の奥州の方の警護に当たったと思われていましたが、実はそうではなく、武蔵国の丸子の警護に当たった可能性もあるわけです。



また、丸子庄と関連してもう一つ注目すべき問題として、正中2年の関東下知状があります。この下知状に葛西新左衛門入道経(きょう)蓮(れん)女子と出てきます。経蓮とは清経のことで、女子とは和田茂長の妻です。その人に関係して稲毛新庄坂戸郷が出てきます。そこで相論を起こしていますが、ここではその相論の内容よりは、葛西氏の所領として稲毛新庄坂戸郷というものがあった点に注目したいと思います。丸子庄ではなく、稲毛に新しく立てた坂戸郷として、新庄と書いてあります。稲毛というのは、稲毛重成という秩父平氏の流れをくんだ畠山の系譜の人物が所領として持っていたわけです。しかし、稲毛重成は、畠山重忠を討つために様々な謀略をめぐらし、最終的に畠山重忠が亡くなった後に成敗されてしまいます。稲毛重成が成敗されて、稲毛庄は北条の所領になったと言われていますが、畠山重忠を攻めるに当たって先陣をつとめたのは葛西清重です。解釈が分かれるところですが、もしかしたら、このときの手柄で坂戸を与えられた可能性もあると思います。丸子の隣接地をまた葛西がもらった可能性もあるということです。

4.5 両地域の所領経営の共通性

最後の話題ですが、「両地域の所領経営の共通性」ということで話をまとめたいと思っています。

まず、この共通性として指摘すべきは、陸上交通と水上交通の結節点であるという点です。



鎌倉、丸子、葛西という地域があります。鎌倉時代は鎌倉街道が通っていましたが、その前の古代には古代東海道が通っていました。東京の下町は家康が入ってから開発されたのだと考える方が多いですが、そんなことはありません。家康は関東を押さえたが、関東を経営するときに、どこを本拠にするのか。領国経営するうえでそのことを考えずに江戸に入るわけがありません。まして、敵対していた北条氏が治めていた領国です。そこに新しい領主が入るにあたり、経営するために一番良い地域を考えることは当然なことです。

秀吉と立ち小便をして江戸になったなどの話は後から作られたもので、家康は小田原攻めの際、小田原北条氏が滅亡する前に、江戸の状況を既に把握しています。また、北条氏と家康の娘は婚姻関係です。もともと家康は、秀吉がアクションを起こす前は、何とか北条とやっていこうとしていました。北条は関東の経営について、ノウハウを知っており、それをもって江戸に入っていきます。何も無いところに入っても経営などできません。『吾妻鏡』には、頼朝が入る前の鎌倉は何もなく、寒村だったと書いてありますが、まだ平清盛は健在で、各地には平家方の武士が沢山いるわけですから、そんな状況下で鎌倉に頼朝が入るわけですから、寒村ではありえず、それなりの理由があるわけです。つまり、頼朝や家康を賛美する筆遣いを私たちは鵜呑みにし過

ぎているわけです。発掘をすると様々なものが出てきます。鎌倉は、相模国の鎌倉郡衙があったところで、古代においても郡の中心地だったことがわかっています。

下町の話をしめすと、下町は開発されていたというイメージがあります。江戸という地名や、浅草の方にある今戸という地名、さらに江東区の亀戸、それから葛飾の奥戸や青戸。このように、「戸」のついた地名が実は東京の下町に多いのです。この地名は、東京の下町地域の古代末から中世の開発の状況を教えてくれる資料となります。なぜかという、地名につく「戸」は、もともとは「津」だと言われています。青戸というのは「青津」、亀戸は「亀津」、江戸は「江津」ですね。

東京下町地域の地名を研究する上で2つの史料があります。1つは応永5年(1398年)の「葛西御厨田数注文」です。御厨は、伊勢神宮の荘園だったので御厨と言われていますが、「葛西御厨田数注文」に当時の郷村の名前が出ています。もう1つの史料は永禄2年(1559年)の「小田原衆所領役帳」で、小田原の北条氏の家臣が持っていた所領の名前が書いてあります。その2つを比較すると、どのように地名が変わったかがわかります。「小村井(おむらい)」という地名をご存知でしょうか。東武線に小村井駅という駅があります。もともとは「おむらえ」と発音する地名がありましたが、永禄2年、戦国時代には「おむらい」に変わりました。言いやすい方になったのです。

先ほど「津」が「戸」に変わることを紹介しましたが、「戸」の地名が分布しているところは交通の要衝です。それが東京の下町には点ではなくエリアとして多く分布しています。さらに視野を広げると、そのエリアは上流部と海をつなぐターミナルとして機能していました。平安時代の終わりから中世にかけてそのように開発されていたのです。

そのことが説明されないまま、すぐに家康の話をしてしまう風潮があります。江戸城の本を読むと顕著です。太田道灌は15世紀の後半の人で、江戸城



をつくったと言われており、その後主君に殺されました。道灌亡き後の江戸城には、扇谷上杉氏が入りますが、そのことは余り書いてありません。次に、すぐに家康が入ったと書いてあります。家康が入って江戸城を造っていった。その間どうなっていたのでしょうか。

その間、重要なのは小田原北条氏です。小田原の北条氏が江戸衆という軍団を組織しており、その本拠が江戸城でした。しかし、江戸城に入った小田原北条氏のことは触れられておらず、いきなり家康のことが書かれています。それは乱暴だと思い、今そのあたりを解説した本をまとめたいと思っています。要するに、後の時代の歴史を参考にし過ぎるあまり、実際の中世の姿、たとえば家康時代の姿を飛ばし過ぎています。

話は鎌倉時代に戻りますが、家康が利根川の東遷事業を行う前には、葛西のところを利根川が流れており、これによって内陸と海が結びついていたわけです。同様に、丸子は多摩川の下流部であり、上流には武蔵府中があります。この陸上交通と河川交通が交わる場所、すなわち結節点であるという点が丸子と葛西は共通しています。今回、この講演のお話を頂き、もう一回「吾妻鏡」を読むと、あることに気がつきました。「吾妻鏡」の文治5年、奥州合戦のときに奥州藤原氏が滅ぼされました。葛西清重はその戦後処理をしています。頼朝は鎌倉に戻りましたが、清重は残りました。奥州藤原氏を滅ぼした後なので奥州の国内は疲弊し、民衆は動揺していました。その民衆を治めるべく、清重は様々なことを試みています。その一つとして市を立てました。市を立てた結果、民衆が治まったため、頼朝から感謝されていたのです。私は初めこれを読んだとき、全然気がつきませんでした。が、「市」がポイントだったのです。

陸上交通と水上交通の結節点とは、物や情報が集積する場所です。つまり、清重は奥州に行って初めて市を立てたわけではないということです。地元でこのような経済的な場所をしっかりと経営できるノウ

ハウを持っており、そのノウハウの一つに市を立てることもあったのだろう、だから奥州に行って市を立てられたのだろうと深読みできたわけです。今回いろいろお話をしていますが、鎌倉武士は、単に戦をし、武芸にいそむるだけでは、とても武士としてやっていけなかったということが分かります。

東大寺の図書館で見つかった文書によって明らかになりましたが、太田庄で堤を修復したり築いたりすることを命じられるということは、その技術を持っていたということです。太田庄の前に、丸子庄で同様のことを行っていたのです。丸子庄でやっていたということは、葛西の本拠でもやっていたということになります。要するに低地+河川で構成される所領は、堤を築く技術がなければ、経営できないということです。低地の開発ではこの技術が大切でした。この開発を鎌倉時代からやっていたということは、先ほどの東大寺の図書館の史料でも確認することができます。また「吾妻鏡」でも、葛西氏だけではなく、御家人に武蔵野の開発をさせたとあります。開発の技術を御家人たちは持っていないとやっていけなかったわけです。特に低地の場合は、堤を築く技術というものが重要だったと考えられます。

この低地の開発は葛西氏以降も続き、戦国時代にも小田原北条氏が堤を築くという文書が出ています。また、小田原北条氏が江戸や葛西に入る前に、上杉氏がこの地域を押さえていたときの史料として、1509年に連歌師の宗長が葛西に来たことが書かれています。そこには、葛西庄は四方を大きな堤に囲まれており、雪の中の堤を歩いていくと、まるで山の中を歩いているようだ、とあります。既に立派な堤を葛西では築いていたのです。このことは、堤防を築かなければ、葛西という地域は開発できなかったことを意味します。



4.6 おわりに

おわりにということで、今まで話してきたことと関係する、秩父平氏の中の派閥争いをお話します。

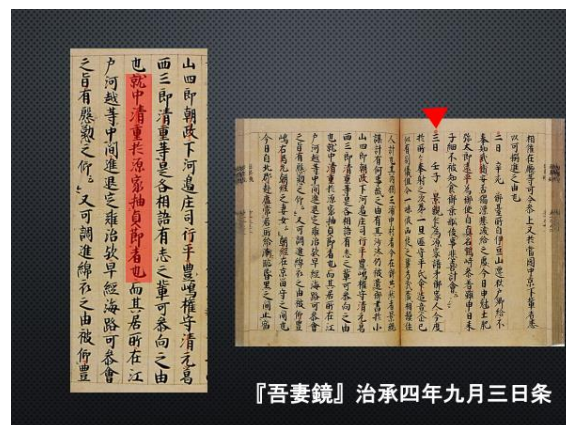
【資料7】『吾妻鏡』寿永元年（1182）八月十一日条

・伊豆山	（伊豆山神社 静岡県熱海市）	土肥遠平
・笠根山	（箱根神社 神奈川県足柄下郡箱根町）	佐忠家
・相模一宮	（寒川神社 神奈川県高座郡寒川町）	梶原景高
・三浦十二天	（十二所神社 神奈川県横須賀市）	佐原義連
・武蔵六所宮	（大國魂神社 東京都府中市）	葛西清重
・常陸鹿嶋	（鹿島神社 茨城県鹿嶋市）	小栗重成
・上総一宮	（玉前神社 千葉県長生郡一宮町）	上総良常
・下総香取社	（香取神社 千葉県佐原市）	千葉小太郎成胤
・安房東條社	（天津神明神社 千葉県安房郡天津小湊町）	三浦義村
・安房洲崎社	（洲崎神社 千葉県館山市）	安西景益

「吾妻鏡」より、寿永元年の8月11日の条に、頼朝の妻の北条政子が産気づいたので、安産祈願のために神社に参拝させました。すべて一国を代表するような重要な神社です。ここで注目されるのが武蔵六所宮、今の府中市の大國魂神社ですが、ここに葛西清重が派遣されています。武蔵国の役所的な管轄は、秩父平氏の中でも主流派である畠山氏や河越氏がやっていました。秩父平氏は、将常の後に武基と武常という兄弟がいます。この武基の流れをくんだのが秩父平氏の主流派で、武蔵国で重要な役職を任じられました。

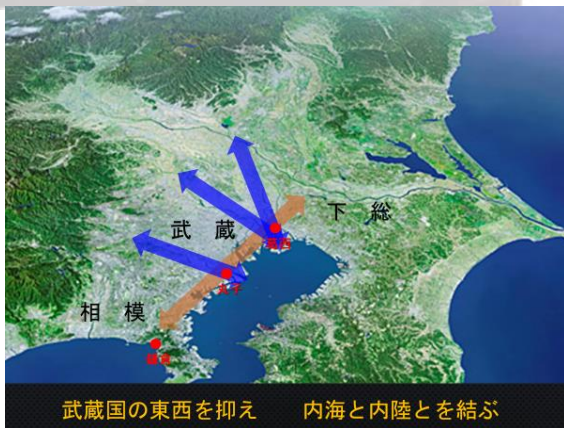
それに対して武常の子孫である清光や清元は傍流です。同じ秩父平氏でも実は大きく2つに分かれています。武基が主流派で、この主流派はもともと平家方でした。江戸重長も主流派であり、江戸重長と敵対していると武蔵国に入れないため、清重が説得して入ることができたという話をしました。

石橋山で負けた頼朝は、舟で安房国へ入り房総で再起をかけますが、早い段階の9月3日に関東の諸勢力に対して、早く自分のもとに来て力をかけてほしいという書状を出しました。その書状の中に小山氏や下河辺氏やその他多くの名前が出てきますが、この中に豊島権守清元、葛西三郎清重が出てきます。9月3日の時点で頼朝は、小山氏、下河辺氏、豊島氏、葛西氏を頼りにしたわけです。



ここで注目したいのは、『吾妻鏡』に「^{なかなか}就中清重は源家に忠節を尽くす」人物なのだと書いてある点です。他に並々ならない大勢力がいる中で、頼朝はなぜか清重についてだけ筆を振るっています。その後、何と書いてあるかというと、清重が江戸と川越の間にいるとあります。江戸と川越というのは江戸氏と河越氏です。9月3日の時点では、河越氏も江戸氏も平家方でした。頼朝は、敵対する勢力の間に清重がおり、なかなか動けないだろうと考えていました。そこで、清重に対して海路を使って来るように書いているのです。頼朝は、秩父平氏の中の主流派と傍流の関係も実はしっかり熟知して、その中で清重に対し誘いをかけていたわけです。

それを前提とすると、武蔵六所宮に清重が派遣されたことは何を意味するのでしょうか。本来であれば、畠山氏もしくは河越氏が派遣されるのが筋です。そこを葛西清重が派遣されたということは、武蔵国の中でいかに清重が重要な役割を担っていたかを教えているのではないのでしょうか。



先ほどの水上交通と陸上交通の結節点でお話ししましたが、葛西清重が本拠と丸子を押さえる意味は、武蔵国の出入り口を清重が押さえることです。河川交通の出入り口は陸上交通が結節しています。鎌倉道の渡河地点にあたるところを清重に押さえさせました。加えてこれは、大きく見ると内陸部からの出入りもあわせて管理していることになります。鎌倉の治承・寿永の内乱期において、葛西清重が武蔵国においていかに重要な役割を担っていたか、そのことを葛西清重が丸子庄を拝領したことが教えてくれると思います。また、同じような環境を経営できるノウハウは、実は葛西で培ってきたものであることも重要だと思います。

今回、丸子庄の講演依頼があり、逆に私の方が大変勉強になりました。ありがとうございました。また、足りない点は後の話の中で補足させていただき、内容を充実させたいと思います。どうもありがとうございました。

パネルディスカッション

コメンテーター：谷口 榮氏（府中市郷土の森博物館館長）
 小野 一之氏（公益財団法人多摩市文化振興財団学芸員）
 橋場 万里子氏（国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター特任准教授）
 岩橋 清美氏（多摩川立歴史博物館学芸部長）
 望月 一樹氏（東京大学総合研究博物館研究事業協力者）
 小田 静夫氏
 コーディネーター：神谷 博氏

5. パネルディスカッション



谷口氏



小野氏



橋場氏



岩橋氏



望月氏



小田氏

●神谷コーディネーター

本日はまとめのシンポジウムということで、これまでの中世の4回シリーズでご講演いただいた各先生方に来ていただきました。深澤さんをご都合つかず、かわりに小野さんに補足いただきます。小野さんには全体のまとめをお願いします。

●小野コメンテーター

小野と申します。谷口さんの話は何度も聞いており、本も大体読んでいるつもりですが、毎回感銘します。まず感想として、谷口さんが最後に紹介された「吾妻鏡」についてです。寿永元年、北条政子の安産祈禱の記事がありましたが、実は武蔵六所宮、大國魂神社が、初めて歴史上の文献に登場する史料です。11世紀後半に誕生した武蔵国の総社が、およそ100年後には武蔵国を代表する神社になっていた

と理解していましたが、それに加え、葛西清重を派遣した意義を本日教えてもらいました。また、傍流である清重が頼朝に重用され、国府に送り込まれるというような状況だったことも示されました。

頼朝が隅田川を渡り武蔵国に入ったときに、頼朝自身も国府に入ったと考えられていました。そのとき江戸重長に、武蔵国の諸雑事の沙汰を命令しています。隅田川渡河にかかわって大きな功績のあった葛西清重と江戸重長を、いずれも武蔵の国務に当たらせたことが重要だと思います。どういうことかと言うと、古代において国府を中心としていた武蔵国が、開発を前提として多摩川下流域に版図を広げています。国府中心の武蔵国が、東京低地も含めた多摩川の下流域を版図にし、新しい中世の武蔵国を迎える意義があると考えられます。鎌倉に幕府が置かれて鎌倉街道が敷設され、関戸・府中、丸子あたりに渡河点が設けられ、それぞれ上道(かみみち)、下道(しもみち)となったことも全く偶然ではありませんし、意義があると感じました。

もう一つは、東京低地に「戸」の地名があり、それは「津」の転化で要衝であったという話についてです。前回のセミナーで橋場さんが関戸の重要性を捉えました。関戸の「戸」というのは「津」や「港」という意味がありますが、これもやはり要衝で、東京低地だけではなく多摩川流域にも「戸」地名があることが分かります。谷口さんが先ほど紹介した関東下知状の中に、稲城新庄の坂戸郷が出てきました。坂戸にも「戸」があります。本日、南武線で乗り換えましたが、乗換駅の登戸も「戸」です。低地だけでなく、多摩川流域に「戸」地名があることもおもしろいと思いました。全て「津」がなまって「戸」になるとは考えにくいので、あるいは「戸」自体に津や港という意味合いが含まれているのかと考えました。



●橋場コメンテーター

橋場と申します。本日は、谷口先生のお話、大変おもしろく拝聴させていただきました。関戸と共通する話が非常に多いと感じおもしろかったです。私が中世2回目のセミナーで話させていただいたのは、今回の鎌倉幕府の初めのころの話ではなく、ちょうど幕府崩壊の1333年に新田義貞が鎌倉幕府軍を破るという分倍河原・関戸合戦の話でした。新田義貞が多摩川で幕府軍を破り、その後一気に鎌倉に攻め込むということから、そこが最後の鎌倉幕府の防衛線になっているというお話をしましたが、今回のお話を伺い、国府と河川の関係として、立地関係が関戸と共通すると思いました。東西南北の違いはありますが、川の向こうに国府があり、川があり、その後ろに街道があり、政治的拠点につながっているという点では、非常に類似しています。

それから、陸上交通と水上交通の結節点であるという点も関戸・分倍河原と同じです。鎌倉街道の上ツ道と多摩川の交流点が結節点になりますので、そこも共通点であると思いました。今回の話は下ツ道の話で、多摩川の方は上ツ道の話なのですが、中ツ道とかも含めて、網の目状にそのような位置関係があるのかと思いました。

関戸には武蔵国府の終焉地という特性があり、数多くの板碑や葬送地があります。そのような境界地としての特性が、先ほどの地域にもあるのか気になりました。

●岩橋コメンテーター

岩橋です。私自身はこのシリーズの第3回を担当させていただきました。そのときにも話しましたが、私は中世史が専門ではありません。私は多摩地域の近世史を研究しております。3回目のときに近世史、つまり江戸時代の人が見た多摩川をテーマにした講演で、「調布玉川惣画図」という絵画史料を使い、そこに描かれた多摩川流域の人の暮らしや地域の名勝や歴史意識について話しました。19世紀初

頭が多摩川流域の人々が考える歴史とは、先ほど橋場さんのお話にもありましたように、鎌倉幕府が崩壊した頃、つまり「太平記」の世界であったという話をさせていただきました。

その点で、谷口先生との接点はあまりありませんが、本日の講演の内容は、近世史を専門とする私には全て新鮮で、正中2年の下知状など、先生が調査をなさり新しい視点を出されていたところは大変勉強になりました。

特に近年、寿永の乱あたりのことについては研究史が微妙に変わってきております。頼朝に味方する人たち、また平氏側につく人たちは、必ずしも一枚岩ではなかったと言われますが、本日のお話では秩父平氏が一枚岩ではないところから葛西清重の存在が浮き彫りになってくると思います。葛西清重という鎌御家人は、武力だけではなく知力、テクノクラートとしての技術力を持ち、民政官として所領を経営したことで鎌倉幕府を支えたという指摘はたいへん興味深かったです。

そういう視点で多摩川流域の中世、近世移行期における各地域の土豪に注目すると、当該期の多摩川流域史も変わってくるかもしれません。

また、なぜ徳川家康が江戸に幕府を開いたのか、なぜ頼朝が鎌倉に幕府を開いたのかは、非常によく問われるところです。ここについても本日のお話では鋭く切り込んでおられました。中世から考えてみることで徳川幕府の成立過程の見方も変わってくるという御指摘はとても勉強になりました。ありがとうございました。

●望月コメンテーター

神奈川県立歴史博物館の望月と申します。谷口さんのお話で、特に最後のところの、葛西氏が武蔵国の出入り口を押さえていたという点は非常に重要な視点だと思いました。私は神奈川県でずっと研究をしていたので、本日の話の中心である東京低地について、本で勉強しているぐらいでした。実際に自分



で研究はほとんどしておらず、本日お話を聞けて大変参考になりました。

私がフィールドとしていた川崎には、丸子庄が関係しております。葛西清重が丸子庄の拝領をした理由は、清重の御功もあるのでしょうか、もともと丸子庄は、清重以前から既に存在していたと考えられております。では、誰が丸子庄をつくったのでしょうか。同じ秩父一族、江戸一族に丸子三郎家重という人物がいて、彼が開発領主か、あるいは葛西清重が入る前に丸子庄を領していたと考えられています。葛西とは同じ江戸氏一族なので、その関連もあり丸子庄に入ってきたとも思われます。

一方、稲毛庄は、丸子庄に続く形で多摩川沿いに存在しておりました。谷口さんは、河川というのは洪水ばかりではなくて、その恩恵を考えなければいけない。単に洪水を起こすだけでなく、洪水で上流から様々な有機物を含んだ土を運んでくることで、下流域は肥沃な土地になっていったとありました。私は前回のセミナーで、それをもとに稲毛庄は成立したと話をさせていただきましたが、稲毛庄自身は平安時代の終わり、おそらくは平治元年にはでき上がっていた荘園です。東国にしては比較的史料が数多く残っており、具体的な姿がよくわかります。現在の中原区の上小田中や下小田中、あるいは宮内や井田といった周辺地域は、おそらく荘園領域でした。荘園の中は本庄と新庄と分かれており、もともとあったのが本庄で、その後土地開発がされて新庄ができ上がったと思います。両荘園とも、都の公家ですが、もとは九条家が所領していたものです。本庄の方は、承久の乱以前に天台宗の慈円という有名なお坊さんの所領になっていましたが、承久の乱以後に関東御領に変わっています。残りの新庄は、おそらく九条家、一条家、二条家という形で摂関家が引き継いだと思われますが、史料の中には「地頭請」という言葉も出てきておりますので、おそらく実際の管理は地頭の北条氏だろうと思います。

その新庄の部分につきましては、その後も「太平記」の中に、新庄の12号については江戸遠江海守が領しているという形で史料上には出てきます。江戸遠江海守が誰なのかは難しいところですが、同じ江戸氏ということで考えれば、先ほどの正中2年の史料とのつながりもうかがえると考えております。

そうした交通の結節点は、近世で言えば中原街道です。おそらくこの庄が、古代から通じているその渡河地点が葛西氏に押さえられたと考えられます。地形的なものも具体的に地図で示していただき、非常に勉強になったと思っております。

●神谷コーディネーター

国府終焉地の話で橋場さんから谷口さんへの質問がありました。お答えはありますか。

●谷口コメントーター

武蔵国府の終焉地として板碑の事例が紹介されましたが、下総国府の場合は、宗教的な意味で終焉として特徴的な事例はまだ見つかっていないと思います。少なくとも葛西には、そのような面影はないと思います。

【会場からの質問カード】

資料8の原図中に付記されている系図の①から⑤の番号の意味は何ですか。

●谷口コメントーター

武蔵国の国府の責任者の順番です。今回余り重要ではなく、秩父平氏の武基系と武常系があり、主流派と傍流であったとこの系図を理解いただければと思います。

●小野コメントーター

①からの番号は、武蔵国留守所総検校職を継承された順番です。重綱から始まり、重頼のときに河越から剥奪されて重忠に戻されたということで、武蔵国府の役所の総責任者の継承順番のようです。

●望月コメントーター



秩父氏の河川との関係という点で、もともとは荒川上流に秩父氏、畠山がいて、彼ら一族は武蔵の河川沿いにどんどん版図を広げてきました。それは彼らの名乗りから言っても、江戸氏や河越氏や葛西氏とわかります。彼らが名乗った一族ごとに分かれていくかを示す一つの事例として、秩父重弘の息子の中に小山田有重という人物がいます。彼は現在の町田に本拠を構えました。町田は、鶴見川上流をずっと遡っていくと小山田という地域になりますので、いってみれば鶴見川の最奥部分に小山田は本拠地を構えたことになります。その子供が稲毛重成と榛谷重朝で、稲毛重成は先ほど出てきた稲毛庄、すなわち多摩川の下流域の部分を押さえます。榛谷重朝は鶴見川の下流域を押さえていましたが、秩父氏一族の系統を見ていくと、どうやら荒川など大河川を中心にしていたようです。そこから次第に下流に版図を広げながら、さらに枝分かれした一族が、また小中河川の中で版図を広げていく姿が見てとれると思います。これは、先ほど谷口さんの話にあった、葛西氏が陸奥で所領を構えたときに北上川の奥の部分に所領を構え、その河口域にもう一つ所領を持ち、北上川の河川交通を押さえていたこととも相通ずる部分があると感じました。

●神谷コーディネーター

多摩川を中心にまとめていこうとしている本セミナーですが、それだけでは全体を見失うことがあります。先ほど岩橋さんから、分野間の交流の少なさのご指摘がありました。本日はそういう意味でも、外からもう一回多摩川を見直してみようという趣旨がありました。

●岩橋コメントーター

地域史全般の問題として、自分がどの視点に立って多摩川を眺めるかは大事な点だと思います。本日谷口さんのお話を聞き、地形の問題や航空写真をうまく読み取っている点が重要だと思いました。地図・絵図を用いて現在の地形から時代を遡っていく手法

もあると思います。地質や地形といった歴史学の周辺の様々な分野と関わっていくことで新しい多摩川像をつくれると思います。歴史学者だけではなく、隣接する異分野との融合が重要なのではないのでしょうか。

●神谷コーディネーター

先ほど国府に関連するご質問がありましたが、橋場さんから以前に災害関係や築堤のお話がありました。

●橋場コメントーター

災害の話と、岩橋先生の絵図を使ったというご指摘にも関わりますが、中世の多摩川を考える上で非常に難しいところは、流路変動が把握できていないことです。例えば、関戸合戦の戦場はどこであったかと聞かれても、今の多摩川よりもかなり北の方としか言えません。近世であれば多くの絵図が残っており、各洪水で多摩川がどう変わったか言えますが、中世の多摩川の流路変動は史料が少なく正確につかむことができません。そのため、中世の多摩川や周辺の歴史を話すときや、地形を考えるときにも、その前提となる多摩川の位置がわからないことが課題になっていると思います。その解決法を今後考えていければと思います。

●神谷コーディネーター

多摩川では、流路変動がわかっているようでわかっていないところがあります。低地の方は流路変動がもっと大きいので、同じような苦労もあると思います。多摩川と利根川は根本的に川の性格が異なりますが、中世の中でも早い時期と後では異なると思います。本セミナーはこれから中世から近世へと移りますが、江戸に家康が入る時点で、非常に大きな洪水があり、利根川東遷事業などが行われました。

中世には大きな雨や災害が何度もありました。小野さんは国府関係の史料で把握されていると思いますが、府中あたりでは大きな変動がありましたよ



ね。国府周辺については流路変動の状況を把握できていると考えてよいですか。

●小野コメンテーター

多摩川の流路変更は、府中から上流の方ではほとんど起こらず、府中から下流で変動があったと思っています。

以前の深澤さんの報告でもあったように、多摩川の北側、府中のあたりでは低地の部分がかなり広く、地籍図の中には旧流路が明確に示されています。それによると、京王線の駅の中河原駅と聖蹟桜ヶ丘駅の間に多摩川が流れていますが、中世のころには中河原と分倍河原の駅の間を流れていました。

ですから、橋場さんの仰った関戸合戦の場所は、今の関戸よりもかなり北側で、現代の行政範囲では府中市域の方に広がっていた可能性もあると思います。その証拠に、中世の文書には関戸領の中河原郷が出てきます。中世まで遡ると、そこから下流では流路変動があったと言えると思います。

●神谷コーディネーター

谷口さんのお話で、陸路と川道や海路の話が出てきましたが、戦国時代よりもずっと以前からある話だと思います。小田先生に、もう少し長い視点で見て一言頂けないでしょうか。

●小田コメンテーター

谷口さんには、学生時代から東京都の様々な発掘に参加してもらいました。私も葛飾区を担当したため、葛西城も、加藤晋平先生と谷口さんたちと発掘しました。先ほどの寅さん埴輪も谷口さんが発表しています。あと、大島戸籍の中にトラメやサクラメ、「さくら」とか「寅」があるということで一度新聞に載った際に、私も解説したことがあり、付き合いは長いです。伊豆の発掘もよく彼と一緒に行きました。谷口さんは水が好きだったようで、水のことを学生時代からよく勉強していたのでしょう。地形的なものを、考古学的なテーマに基づいて、あれだけの文献を読むようになったのは大したもの

です。本日の発表を見ていると、考古学的なベースから、歴史のつながりを上手く掴まれたのではないかと思います。

多摩川の流れがいつ頃からどうなったかという歴史資料はありません。私の調べでは、大体3～4万年前には武蔵野台地あたりでは頻繁に大雨がありました。当時は暖かく日本全国が多雨の時代でしたので、多摩川では常に洪水が起きていました。明治大学をつくるときに、調布の遺跡を発掘しましたが、約2.5～3万年前の地層には物すごく小さな砂利が入っています。芋石と呼ばれる、芋のような石です。その地層を境にして、旧石器人が災害に遭ったことが分かります。

大田区の田園調布あたりの多摩川河川敷では、鉄道を再整備するために発掘を行いました。その際に、かなり深い地中から縄文時代後期の遺跡が出てきました。3～4千年位前の遺物が、今はグラウンドになっているような多摩川の河川敷の数メートル下から集落として見つかっているのです。河川敷にそのような自然堤防ができていて、そこに縄文人が住んでいたことは確かです。縄文時代あたりまでは、多摩川の流域の中ではある一部分でしか生活できませんでした。

弥生時代になると状況が変わります。雨が少なくなり、少し寒くなります。米は暖かい地域の原産ですが、寒い地域の方が美味しい米ができます。日本列島に農業が伝来すると、かなり寒い地域に良い米が出来ました。なので、大田区のずっと羽田のところまである河川敷のあたりに大水田があり、それをもとに生活していた人たちが田園調布に住んでいたと考えています。今では高級住宅地ですが、昔は美味しいお米を元に田園調布に大集落ができたのです。私も田園調布南遺跡の発掘に参加しましたが、そこに19メートルぐらいのお墓がありました。そして、古墳の主体部、田園調布南高校の敷地からすごい首飾りが出たのです。つまり、そこに弥生の大



集落があり、低地を利用していたことが伺えます。その後、古墳時代になると、またその場所が選ばれました。今度は海を使って、大和の奈良などから軍隊がやって来て、田園調布の山の上に古墳をつくりました。それは田園調布古墳群と言って、100メートル以上ある有名な前方後円墳です。また、鶴見川の方にも古墳がつくられています。両方に大和勢力の力が出てきたということは、もしかすると大田区に邪馬台国があり、卑弥呼の墓があったのかもしれない。

このように、古墳時代あたりまでは下流域が歴史の中心でした。その後、今度は中流の府中に移ってきます。その過渡期で、今から60年前に狛江の亀塚というのを掘りましたが、狛江にも物すごい宝物が出ました。埴輪も出ました。

蛇足になりますが、寅さん埴輪について、谷口さんがすばらしいことを仰いました。あれは寅さんに似ているのではなく、朝鮮半島の王朝の風習の帽子だと。帰化人的な大陸の技術や文化が既に葛飾にも入っていた、その証拠があのだ埴輪だということです。亀塚がまさにそのとおりで、出てきたものは首飾りから埴輪から全て大陸の品物でした。国立博物館に重要文化財として保存されています。

三鷹の古墳、府中の古墳、上田下方墳、大陸と同じ格好、それらが出てきて多摩川の歴史があります。谷口さんのお話を聞いていると、水と流路を利用したことと、要衝を押さえたことが、幕府や国ができた要因とのことでした。そのような地形をなぜ選んだのでしょうか。以前、神谷さんと武蔵国府をなぜあそこにつくったか話しましたが、大陸の風水なのです。国府は、風水を描いてつくっており、鎌倉も風水なのです。海があり、平地があり、後ろに山がある。それは中国の思想です。江戸の八重洲口は八重洲の浜と言います。日比谷の入り江があり、江戸城があります。全て風水思想に基づいて地点を選んでいるわけです。それは古代からつながってい

る日本の途上のシステムができていたということです。

【会場からの質問カード】

太田道灌の江戸城から家康の入府までの空白期間のお話があり、とても興味深く拝聴しました。小田原北条氏が江戸をどのように経営していたか教えてください。家康が入ったときは人口数千人の漁村だったと本で読み、信じておりました。

●神谷コーディネーター

法政大学では江戸東京研究センターが1年ぐらい前に設けられ、私はその中で江戸の基層研究を行っています。いきなり江戸ができたわけではないので、その基層たる中世から押さえていくことを担当しています。本日のまとめで谷口さんが強調されていた「江戸は何もない寒村ではなかった」と、「江戸だけではなく鎌倉もそうであった」というお話に私もとても共感していました。

●谷口コメンテーター

小田原の北条氏の経営方法は幾つかあり、1つは関八州を押さえることです。小田原の本拠は小田原城ですが、北関東の経営をする上で小田原は遠いです。そのため、最後の北条氏直の代に、父の氏政は隠居として江戸城に入っていました。江戸城に入り北関東の経営をしていくわけです。要するに家康は、小田原だけでは広がった勢力図を維持できないため、江戸城に氏政が入り経営することの重要性を知っていたのです。

同様の方針で経営を行った例として、関東の将軍が挙げられます。室町幕府は足利尊氏が京都に興しましたが、東国は遠方になるため、経営するための出先機関が置かれました。鎌倉に幕府を開いた際、初めは義詮が入りましたが、その後は基氏が入って鎌倉公方として治めました。その後、代々鎌倉にいましたが、成氏(しげうじ)という人物が関東管領と敵対して鎌倉にいられなくなりました。成氏は古河に入り、利根川筋を挟み幕府や関東管領勢力と対峙



していきます。その古河公方と言われる関東の将軍は、最後の代は義氏と言いますが、義氏は葛西城に入ります。青戸の葛西城に入った義氏の史料や文書を見ると、古河公方が江戸川の水系の交通を管轄しています。後に、八王子城にいた北条氏照が管轄することになります。

つまり、関東の内陸と海とを結ぶ動脈として、東京低地を流れる河川が特に重要だったということです。そこを古河公方が押さえ、小田原北条氏も押さえました。そのことを考えたときに、江戸という地域は非常に重要です。都市センターのような役割を担っていました。徳川家康は馬鹿ではないので、そのような点も含めて江戸を考えていました。

もう一つ話をします。都市伝説になっていますが、昔は太田道灌が日本橋川を開削したと言われていました。太田道灌のころの江戸城の外堀はおそらく平川です。その平川は、江戸城の大手門に至ります。おそらくそこまでが太田道灌のころの江戸城の範囲でした。一方、小田原北条氏は、その平川ではなく、平川のつけかえをした日本橋川の常盤橋までの範囲を江戸城として縄張りを広げたと思っています。そのことは、一般財団法人 日本地図センターが出している「地図中心」という雑誌に連載していますので、よろしければ読んでいただければと思います。

●神谷コーディネーター

この辺りの話は、中・近世をどうつないでいくかに繋がると思います。「多摩川誌」ができたのが1968年で、「新多摩川誌」が2001年だったと記憶しています。「新多摩川誌」から大分経っており、歴史の研究が進んでいます。この15年ぐらいの間に、中世研究における新たな発見や視点があり、皆さん絡んでいらっしゃると思います。今日もとてもおもしろい話がありましたが、毎回、皆さんにここで新説を紹介していただくような流れがあります。そのような新たな視点や、学会では言えないけどこ

こなら言ってもいいかな、みたいな話があればお願いできますか。

●望月コメンテーター

最近の中世史研究の景観論は随分昔と変わっています。先ほど学際的にという話もありましたが、文献だけでは中世景観の復元はできません。周辺の学問である、歴史地理学、民俗学など、そのあたりと共同して中世景観の復元をしているところが、昔と変わったと感じます。

彼らの方法は、まず現状の地形を把握し、明治初期あたりまでの地籍図で、明治までの景観を掘り下げることから始めます。その中には、圃場整備等で随分景観が変わっている場所もありますので、まずは明治初期、江戸末あたりの風景を復元します。その次に、江戸時代の絵図等を使って、江戸時代の景観を拾っていきます。中世の場合には、荘園図等が残っている場所は復元しやすいようです。また、文献の中にも、ヒントになるようなものがあります。あるいは神社での祭礼や芸能から、地形の中で水脈をどのように利用していたか分かることがあります。中世の武家文書というのは、相続に関わる相論の文書が多く、自分の所領を誰に譲るなど書かれていますので、地名が数多く出てきます。それらをこまめに落とし、中世景観の復元をするのが現在の研究の方法だと思います。東日本は残っている史料が少ないため難しいですが、西日本では三重県や滋賀県、あるいは九州を含め、その分野の研究は進んでいると思います。

本日は交通の話がありました。陸路と河川という絡みで言うと、今日の話は中原の道、丸子の部分での渡河の話と、奥大道の話がありました。現在の川崎の平間あたりが多摩川の重要な渡河地点であったと考えられてきています。あそこは地頭がいて、室町期には丸子庄ではなく丸子保(まるこのほう)という領域の中に平間郷が含まれており、その時代の史料にも出てきます。



先ほどの景観と関連して、神奈川では珍しい「鶴見寺尾郷絵図」という中世の絵図があり、そこに道が描かれています。その道を追いかけていくと、川崎に入ると蟹ヶ谷というところを抜けて平間の方に真っ直ぐ走っていく道があります。どうもこれが奥大道につながる道ようです。その周辺では中世の遺構が見つかっていて、鎌倉を起点とした鎌倉道のいくつかのルートがわかりつつあると思います。その中で平間を渡る道というのが、重要な道になり得ると考えています。

●神谷コーディネーター

新しい視点という意味で、先ほどテクノクラートという話もありましたが、岩橋さんの職場は、いわゆる歴史とは少し違う視点を持っていると思います。中世は山岳信仰が盛んだった時代であり、他には例えば天文学や信仰など、今の我々の状況とかつての風土は大幅異なります。

●岩橋コメンテーター

私は立川の国文学研究資料館にいます。国文学研究資料館は、日本文学およびアーカイブズ学の研究機関ですが、私自身は同じ建物内の国立極地研究所の研究者と一緒に、江戸時代の史料を用いて歴史的オーロラ研究を進めています。

今は、古気候学の研究者とも協力して江戸時代250年間の気候変動や自然災害を科学的に分析しようとしています。これをベースにして、多摩川流域の農業や産業の状況を重ねていきたいと考えています。また、鎌倉御家人がテクノクラートであるという話がありましたが、江戸時代の多摩川流域にもテクノクラートと言える人々がいたので、こうした人々が自然をどのように治めていたかについても興味があります。流域の堤防普請が進むことで、別の災害を引き起こす要因が発生したか、あるいは洪水の被害が収まらないうちに再度、洪水に見舞われるといった複合災害が地域に与える影響も調べてみた

と思います。今後、皆様に何か成果をお見せすることができればいいなと思っています。

●谷口コメンテーター

学会でも話せることを話します。新しい点として、皆さんにぜひ知っていただきたいのは、「文化的な景観」という言葉です。先ほど話が出たところは、「文化的な景観」という手法によって、色々なことが読み解けるとしています。平成16年に景観法ができて、それとともに文化財保護法の改正が行われました。それまでは物に対して指定・登録する制度でしたが、様々な物を含むエリアを文化財として保護しよう、活用しようという取り組みが平成16年から始まりました。その新しい文化財のジャンルとして「文化的な景観」というものが加わりました。全国で今では60ちょっと「重要文化的な景観」というのがあり、例えるなら風景の国宝と言えます。

「文化的な景観」はなかなか説明しにくいですが、地域には土台となる風土、自然環境があります。そこで人が営みを始めて生業を行う中で、景観がどのように形成されたかを、従来の歴史学ではなく、様々な分野の人たちと一緒に共同研究しています。先ほど望月先生が言われたように、現在から遡っていくわけです。どのような景観が形成されてきたか、変遷を見つめて読み解き、その景観の特徴や価値を見出すのです。

残念なことに、この「文化的な景観」の取り組みは西高東低で、東の方はまだまだです。首都圏ですと、板倉、利根川上流の渡良瀬遊水池がありますが、あの辺に1つあります。また、昨年、葛飾・柴又が「重要文化的な景観」に選定されました。ぜひ文化庁のホームページで、「文化的な景観」のシステムを含めて見ていただきたいです。今の多摩川の河川景観だけでなく、周辺も含めて、どのように景観が形成されてきたかという視点で郷土研究をすることがこれからは重要だと思っています。その仕組



みを理解する上で、「文化的な景観」をぜひ覚えていただければと思います。

●神谷コーディネーター

以前のセミナーで、橋場さんに展示を見せていただきました。セミナーの講演では災害のことはそれほど触れられませんでした。災害史は心の問題にも絡み、今の「文化的な景観」につながる部分があると思います。多摩川の災害史を押さえ切れていない現状で、今後どうするかアイデアを頂けないでしょうか。

●橋場コメントーター

以前、「災害と多摩」という展示を担当し、そのときに色々な災害関係の史料を見ました。災害史を見ると、その土地の特色がすごくわかります。例えば、一宮の小野神社は昔から微高地で、大規模な水害のときにも水は来ないと言われていますが、明治40年代の大水害のときには一度境内まで水が迫ったことが語り種になっています。災害をたどることで、その土地の微高地等と伝承されている場所がよくわかるため、歴史の調査や土地の特色を見る際にも、災害史は非常に重要だと思います。また、微地形は非常に重要です。周囲と比べて高い地形よりも、もう少し細やかな地形が災害に大いに関係しているため、そこを見る必要があると思っています。

災害とは少し離れますが、用水に興味があります。戦国時代の有山源衛門という人のところに用水が張りめぐらされていますが、1600年代の前半の絵図にもその用水の堰が描かれていました。その有山源衛門の屋敷をつくるときや、そのあたりを開発するときに作られた用水もあると思いますが、さらに古い用水のようなものがあることが分かっています。大栗川の方から多摩川に向かい、小野神社のあたりまで通る用水を、地元の方たちは古茂(こも)川と言いなわしています。いつのものか分かりませんが、おそらく人工的な用水だと思っており、多摩

川からは少し離れますが、用水というものに注目して見ていきたいと思っています。

●神谷コーディネーター

小田先生は「多摩川誌」、「新多摩川誌」に携わってこられましたが、全体をどう捉えていますか。歴史の時代区分として、中世はどこからどこまでという話はあまり意味がないと思いますが、中世史とは何かは分かりにくい部分があると思います。それらを含めて近世にどうつなげるかは、最後に小野さんにまとめていただくとして、小田先生には、通史の中での中世をどう捉え、今出てきたような新しい視点でこれまでの通説のどこをどう補強するべきか、ご指摘いただければありがたいと思います。

●小田コメントーター

多摩川という川は、今まで子供向けの本など様々な学習の本が数多く出ています。また、「多摩川誌」「新多摩川誌」という全3冊の膨大な読み切れない資料が出ています。先ほどのお話にもありましたが、今、文化庁が文化財保護法を直そうとしています。発掘分野で言うと、今まで役所に就職するには、発掘ができることが条件でした。しかし、それは今の時代には合わないの、民間会社に発掘を委託すれば良いのではないかという風潮があります。

では、文化財保護行政で埋蔵はどうするかというと、先ほど谷口さんが言ったように、文化を復元でき、また観光事業に使えるように遺跡を保存できる人間を積極的に採用していく方針があります。それに対する様々な反対もありますが、その方針の結果、考古学をやっていた人は文化庁から消えました。大学に天下り、一人も残っていません。

そうすると、考古学とはどのような学問として成り立っていくのでしょうか。私は考古学しか知りませんが、最近の考古学は大きく変わりました。いわゆる鑑定学や古物学ではなくなり、総合の学際的な知識を持っていないと考古学は難しくなりました。例えば、中世を発掘すると数多く焼き物が出てきま



す。その焼き物がどこでつくられたのか、どこの土を使ったのか。また、それがどのように流通してその遺跡にあり、使われて捨てられたのか。それらをしっかりと理解し、科学的な分析により解説する。そのような能力が必要な時代が来たわけです。

八王子の城で素晴らしいガラスが出た際に、それはペルシャから来ているということが分析により分かりました。今までは、ただのガラスの破片と扱われていましたが、ペルシャから来ていたのです。そうすると、ペルシャの焼き物がどこからどういうふうに八王子まで伝わったかという話になります。大和に来てから小田原に来たなど、ルーツを考察できるわけです。

そのような視点で、多摩川をどのように扱うべきでしょうか。多摩川という川を文化的に、立体的に捉え、教科書として様々なもの、自然や人文、歴史的なものにも使える、そのようなものを作っていく必要があります。

今まで出た本は、古文書であれば、何月何日に誰々がどうしたという情報が大量にあります。それは、基礎史料としては大切なことです。けれども、それと違う多摩川を見つめることができます。例えば多摩丘陵から見た多摩川、武蔵野台地から見た多摩川。多摩川の低地帯で主に生活していた漁労民もいるでしょうし、水田を耕していた農夫もいるでしょう。また、低地帯を開発しようとした殿様もいるでしょう。そのような視点から見なければ多摩川の歴史は浮き彫りになりません。

多摩川は、関東地方だけではなくどこの地域でも、モデル的な川の歴史として使えるのではないかと思います。そういうものをコンパクトにつくり、インターネットで発信する時代が来るのではないかと思います。そのような夢を持ち、これから一つ一つの中世、近世、また古代から始まるのです。

私がいつも多摩川で思っているのは、多摩川の歴史は古代まではすばらしい様々な本や発表がありま

すが、中世・近世になると何かぼやけてしまうことです。今後は生き生きと、災害史や開墾史も含め、多摩川と江戸城との関係、また葛西城との関係、そのようなものと関連した多摩川を浮き出しにする展望を期待しています。

●神谷コーディネーター

大変ありがたい話でした。「新多摩川誌」の改訂版としてさらに厚い本をつくることはおそろくないのでしょうか。この歴史シリーズをどのようにまとめていくかの展望が見えた気がします。

中世シリーズの総まとめ、また次の近世シリーズにどのようにつながるか、小野さんお願いします。

●小野コメントーター

まとめというのは荷が重いですが、中世シリーズを聞いて学ばせていただいた中で印象的なものを申し上げます。

中世の多摩川の特徴は、開発があり、それに伴い渡河点で要衝ができたことです。都市の誕生ですね。多摩川を中心に考えると、中世にはこのような拠点が中流域から下流域に移動していったと言えると思います。奈良時代の8世紀、東海道の渡河点は、東山道武蔵路が南北に貫通する府中・関戸あたりでした。平安時代に入ると、東海道が武蔵国府を經由せずに下総方面に行くルートが「延喜式」に記載されており、延喜式ルートなどとも言いますが、そのルートが丸子あたりを通過していたと想定されています。その府中、丸子あたりが後の中世の時代には鎌倉街道の上道、下道になっていきます。その後、さらに近世には東海道の多摩川の渡河点が六郷になります。六郷橋は早くになくなりましたが、東海道には六郷の渡しがありました。

このように、多摩川における拠点は中流から下流に移動していきました。中世の時代にはそのような流れがあったのです。それを前提にして江戸に幕府が開かれたと思います。今日も何度も話題に出ましたが、なぜ江戸に幕府が置かれたのでしょうか。江



戸に幕府が置かれたことによって、今の東京が成り立ちました。言い換えれば、江戸・東京を用意したのは中世が淵源で、特に多摩川の下流域の開発が要因だったと言えると思います。

これまで、キーワードとして「開発」と「交通の要衝」を挙げましたが、このシリーズのキーワードをあと2つ挙げておきたいと思います。それは、「名所」と「流通」です。名所については第6回歴史セミナーで岩橋さんが詳しく報告しましたが、近世に入り江戸地回り経済の発展によって、地元の有力な郷土史家が誕生しました。その中の相澤伴主が描いた「調布玉川惣画図」というのがあり、そこに数々の名所が刻まれています。その惣画図が果たした役割は古代・中世の名所の普及ですが、その創作自体にもかかわっていました。多摩川に古代・中世の名所が誕生したことが紹介されました。

もう一つの流通は、同じ岩橋さんが紹介した筏流しの場面からのキーワードです。筏の集積地である筏宿というものが多摩川の惣画図に詳細に描かれていました。多摩川が明らかに流通の舞台であったと言えますが、中世にどうであったかは定かではありません。荘園経済の進展により、古代の一極集中的な経済ではなく、水陸両方の交通が活況化していたと思われます。多摩川の水運について板碑を例にすると、荒川の上流域は石の産地ですが、その中でも武蔵型板碑は、荒川流域、入間川流域、多摩川流域に分布しています。その中で証拠はありませんが、板碑の流通に多摩川が関わったことは確実に言えると思います。また、陶磁器を例にすると、東海産の常滑焼の大きな瓶が品川で見つかっています。多摩川を遡って府中あたりまで入っていますが、あのように大きなものは舟運により輸送されたと考えられます。実態はわかりませんが、中世の多摩川はどのように流通の舞台であったと予想がつきます。

以上の開発、要衝、名所、流通の4つのキーワードは、それぞれリスクを伴っており、その点も考え

る必要があります。開発のリスクとは、対象地域が流域や低地であることによる、洪水や流路変更です。中世にこれを具体的に描いた話が、鴨長明の「発心集」の中にあります。入間川に大きな堤を築き、その中に村をつくりましたが、大洪水で流されてしまいました。その村長にあたる在地領主が、秩父冠者と書かれていました。本日、谷口さんが指摘した桓武平氏または河越氏の誰かが流域の低地開発をして村落経営を行っていましたが、全村流失という事件が起きるリスクが常に伴っていたわけです。

2つ目の要衝のリスクは何でしょうか。交通の要衝であることのリスクは、橋場さんの講演にあった合戦・戦争です。合戦・戦争は、重要でない田舎で起きるものではありません。分倍河原・関戸の合戦は国府をめぐる合戦、多摩川の要衝をめぐる合戦であったように、要衝であることにより争奪戦、戦争が起きるリスクがあります。

もう一つ、河原で合戦が起きる理由として指摘したいのが穢(けが)れの問題です。「徒然草」の宿河原の中の、ぼろぼろという仏教修行者、放浪の修行者が決闘する場面では、穢れを伴うという理由で場所を河原へと移しています。古代以来の思想では、河原のような広々とした空間、開かれた場所では穢れが伝播しないという考えがあったと指摘する研究があります。都市部での都市や国府をめぐる合戦であっても、戦者の穢れを伴うので、それが伝播しないように河原に出て合戦をしていました。河原の合戦は多くありますが、そのような背景があると考えています。

宿河原について、「徒然草」ではいきなり宿河原が出てくるので、場所がどこか気になりますが、様々な注釈書を見ていると川崎の宿河原だという話がありました。それで、望月さんがかかわって石の碑を書かれたと聞きました。職人歌合の中で、ぼろぼろの歌に武蔵野を詠んだものがあり、全く武蔵と



関係ないとは思えませんが、そのような河原での話題があります。

3つ目の名所のリスクは何でしょうか。名所をつくるに伴うリスクとは、歴史の捏造です。捏造が言い過ぎであれば、名所の固定化や、聖地の固定化です。岩橋さんの講演で、相澤伴主が名所の創作に関わっていたとありましたが、それにより特定の聖地、名所が創作されて定着してしまうことがあります。

本日の会場は狛江ですが、狛江というと万葉歌碑があります。「多摩川に さらす手作り さらさらに何そこの児の ここだ悲しき」という有名な東歌があり、その歌碑が河原の近くに今もあります。これも万葉の聖地みたいなもので、固定化が図られています。あの碑は文化年間につくられており、比較的新しく文化財的な価値が低いようにも見えますが、1800年代の江戸時代につくられた歌碑です。加えて、字を書いたのが松平定信で、歌碑をつくるために江戸で勧進活動を行い、歌舞伎上演まで行ったという話があります。そのように、狛江の万葉歌碑が大げさに取り上げられると、そこが歌枕聖地となります。あの万葉歌碑が洪水で流され際には、大々的な捜査活動が行われました。その後、渋沢栄一がかかわって大正11年あたりに同じ碑を再建したと聞いております。そして、除幕式を執り行おうとしたときに今度は関東大震災が起き、式が延期になってしまいました。そうなるとさらに話題が増えます。それがすごいアピールになったため、狛江は万葉集東歌の聖地として圧倒的な力を持ちました。それはそれでよく、リスクと言えるかはわかりませんが、名所の定着が多摩川流域で行われていたということです。

4つ目、流通のリスクとは争いです。近世で言えば、筏流しの筏師と、漁労に携わる人あるいは渡し船との争いが近世文書にあると聞いています。最近、「日本史研究」という雑誌で岩田さんが論文を

書いていましたが、江戸都市部の問屋商人と生産者との相克の問題を、多摩川を舞台にして扱っていました。

このように、多摩川が開発と交通の要衝であったこと、また、名所と流通の問題にはリスクを伴うことを中世を通じて学びましたので、近世、近現代以降もそこに注目しながら考えていきたいです。近世以降は特にリスクの問題が増幅されると思います。公害の問題、埋立地、騒音の問題、いろいろありますが、4つのキーワードとリスクを含めて、近世、近現代の多摩川を考えていければと思います。

●神谷コーディネーター

時代と場所とをどう見ればよいかという考え方の枠組みを示していただけました。これがこのシリーズで考えてきたことであり、それを近世にどうつなげていくかという話になると思います。

一通り予定していた内容は終わりましたので、先生方から最後に一言ずつお言葉をいただければと思います。

●谷口コメンテーター

本日は、葛西という地域と多摩川の下流域を比較することを話しました。葛西を研究する上で、その地域だけ見るのではなく、地域を比較することで初めて様々なことがわかると思っています。そのため私は、掛斐川の下流域の状況と葛西、東京低地の状況を常に比較するようにしていますが、近い多摩川というのは今まではあまり扱っておらず、貴重な勉強の機会をいただいたと思います。

昔から下流域の人たちは災害とうまく折り合いをつけて暮らしています。そのため、河川のマイナス点ばかりを強調するのではなく、河川の恩恵をしっかり考えることが大切だと思います。開発の仕方について、今日は築堤の話をしました。築堤とは、単に川を治めるのみでなく、築堤をすることで堤の上が道になります。本日は、河川交通と陸上交通の結節ということを強調するためにあえて話を出しませ



んでしたが、築堤そのものが上流と下流を結ぶ道、陸の道になるということも、重要な観点として補足させていただきます。

他には、地名を理解することの重要性を話しました。例えば、亀有という地名が葛飾にあります、亀有の地名の由来を勉強しても分かりません。亀有は、もともとは亀無でした。要するに、亀有云々ではなく、地名の史料をきちんと調べ、もとの形を確かめた上で、どのようにその地名となったのかを調べる必要があります。おそらく自然環境的な要因もあると思いますし、人の労力や介在の要因もあります。地名をどう扱うかは、開発なりその地域の「文化的な景観」の構成要素としてもすごく重要であると思います。

●望月コメンテーター

今日の谷口先生の話も含めて勉強させていただきました。これからは流路の問題を考えていきたいと思いました。私の話の中でも流路について、史料からの読み解き方を紹介しました。本日の会場は狛江ですが、小田原の所領役帳の中に「狛井登戸」と地名が合わさった形で出てきます。「狛井」とは狛江で、「登戸」は川崎の登戸です。それが一体化されているということは、多摩川は今よりも南に流れており、狛江と登戸が一緒の地域であったと考えられます。下流域には他にもそのような地名があります。さらに遡ると、最近、川崎では低地で高塚の古墳が幾つか見つかっています。それらがほぼ自然堤防上に位置していることから、流路の変化の幅の範囲をある程度つかめてきたと思います。それらを踏まえながら、一枚一枚地層を剥がすように流路を考えていければと思いました。

また、多摩川と言うと境界性の話が出てきます。現在は神奈川県と東京都の境界ということで、どうしても対岸という意識が非常に強くなります。此岸と彼岸のように、こちら側とあちら側という意識が強いですが、このように河川を線的に捉えるのでは

なく、流域、右岸、左岸含めた面として捉えたときに、河川がどのような位置づけとなり、役割をなしたかを考える必要があります。当たり前のことかもしれないませんが、川を線的に、または片岸のみに着目するのではなく、兩岸、流域を含めた面として川を考えていきたいと思います。

●橋場コメンテーター

本日は、東京低地との比較という視点で大変おもしろく、特に水上交通や流通の話が非常に印象的でした。玉川上水の方の話になりますが、私が昔、聞き取りをしたときに、玉川上水でも物を運んだというお話を聞きました。多摩川の流路と流通・運搬は関連しているということと、生活でどのように多摩川を利用していたかは今でも聞き取ることができるので、そのような聞き取りの成果を歴史的なアプローチにつなげていければと思います。

●岩橋コメンテーター

私は南多摩・北多摩地域を中心に災害を経験して人々の意識がどう変わったかを研究していますが、福生では大きな水害の経験を、子供にもわかりやすいように絵と簡単な文章にまとめて巻物に仕立て、それを寺子屋の教材として使っていました。災害マニュアルのようなものが作られ、教育機関を通じてそれを学び、地域の知識として蓄積していたのです。災害を経験して地域がどう変わっていくのかについて、異分野と融合しながら巨視的な視点を持ちつつ、一つ一つの災害を丁寧にみていきたいと思います。

●神谷コーディネーター

今日は皆さん、長時間ありがとうございました。私もとても勉強になりました。特に奥大道のお話では、東山道に対しての東海道としか考えていませんでしたが、丸子の視点が非常に重要であることがよくわかりました。本当にありがとうございました。



6. 閉会挨拶

国頭 正信

**(京浜河川事務所
総括地域防災調整官)**

京浜河川事務所の総括
地域防災調整官の国頭で
す。本日はどうもお疲れ



さまでした。谷口さんが葛飾区勤務のため矢切の渡しなどが話にありましたが、私はその反対側の松戸在住です。葛飾区には寅さん記念館や、亀有まで行くと葛飾亀有公園前派出所の両津の像などがあり、大変楽しい町だと思っています。

私が住んでいる地域はよく東葛と言われているのですが、なぜ東葛と言われるのか不思議に思っていました。谷口さんの話に、江戸川を境に東葛と葛西に分かれているとあり、それで昔から東葛と言われていると勉強させていただき、参加して良かったと思いました。

話に出た矢切の渡しには多くの観光客で賑わっていますが、多摩川にもかつて丸子の渡しがあり、今でも年に1回は渡しのイベントをやっています。上流には二子の渡し、さらに上流には宇奈根の渡しもあります。江戸川に行かなくとも、多摩川で渡し経験ができることを知っていただければと思います。

本日、入口で過去のセミナーの開催報告を配りました。京浜河川事務所のホームページにも掲載しています。過去の古代・中世のセミナーの内容が見られますので、もしもらっていない方がいたら、ホームページを利用していただければと思います。

また、今年度は多摩川改修 100 年イベントが動いています。大正 3 年に、川崎市の御幸村で余りにも多摩川が暴れて堤防被害が多かったため、当時の村の人たちが編笠をかけて堤防をつくってほしいと神奈川県庁に押し入った「アミガサ事件」という事件がありました。それを契機にして、大正 7 年に国が築堤工事を始め、今年でちょうど 100 年を迎えたためイベントをやっています。

「多摩川」という言葉が入った校歌は、沿川の小学校で 110 校ぐらいあります。いかに多摩川が周辺の人たちに愛されて学校の校歌に残っているかを聞きました。そこで、「多摩川を歌う」とのテーマで、合唱コンクールを 3 月 2 日に川崎市のエポックなかはらでやります。その中で、約 1 時間、多摩川の過去を振り返り、未来の子供たちにどのようなメッセージを残したらよいかパネルディスカッションを設けますので、ご興味があれば見に来ていただければと思います。



『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世、近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

第2回多摩川流域歴史シンポジウム『多摩川流域の中世』開催報告

作成 多摩川流域懇談会

- 多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。
- 多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL: http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html

